

— 「王道」は往時の交通路—人と物が行き交う道—

上智大学教授 石澤良昭（上智大学アンコール遺跡国際調査団長）

フランス人作家で文化大臣を務めたアンドレ・マルロー（1901-1976）は、その小説「王道」（1930）の中で「荒廃するがままに埋もれていく王道」が密林の中を迷路のごとく縦横に走っていたと書いている。「王道」の冠称はマルローに始まるが、かつてのインドシナ半島の太平洋には濃密な熱帯降雨林が広がり、カンボジアのアンコール王朝時代（802-1431年頃）には鬱蒼とした密林や疎林の中を盛土と一部敷石した王道がアンコールの都城と地方拠点都市を結んで延々と続いていた。すべての道はアンコール都城につながっていた。

マルローの小説では、廃都の中に埋もれた寺々、苔に包まれた石仏、石仏の肩の上に雨蛙が一匹などと描写されている。この「王道」なるものは小説ではなく実在していたことが最近判明した。衛星探査による地形解析および地方の開発調査から、アンコール時代の道路、石造の橋梁、貯水池、環濠、村落などの遺跡が発見された。アンコール・ワットを造営した土木建築技術から考えれば当然のことである。西北方面へ向かう王道はダンレック山脈を越えて現在のピーマイ遺跡を經由してタイ中央部のスコタイ都城まで延びていた。東南方面はベトナム中部のダナン近くまでつながっていた。

こうした往時の道路網については、古クメール語碑文および中国史料からもその輪郭が述べられている。碑文で「ダルマシャーラー（「仏法の家」の意味）」、別名「炉の家」とも言われ、1296年に配信した中国人周達観は「大路上には急速の場所があり、（中国でいう）郵亭のごとし」と証言している。この宿駅は一種の管理や村人の休息所のことである。国内121ヶ所に設置され、王道に沿って開設されており、当時の地方行政と直結していた。現在そのうち約50ヶ所の所在地が判明している。

上智大学アンコール遺跡国際調査団（以下、調査団）は、すでに20年にわたってカンボジア王国政府と協力してアンコール遺跡の保存修復・調査研究活動を実施してきた。

今回は2000年12月にアンコール・ワットから100キロ以上離れた巨大遺跡5ヶ所を、12年の専門

家がテントに泊まりながらヘリコプターを使って踏査した。この5ヶ所の遺跡はいずれも最近までポト派軍に占領されていた。

5大遺跡というのは、第1に東へ125キロ離れた7席のカンボジア王朝の都城サンボール・プレイ・クック、第2はさらに北東へ100キロ離れた10世紀の王都コーケー、第3に東へ40キロ離れた12世紀初めの「東のアンコール・ワット」ペン・メリア、第4に東に105キロ離れたところにあるアンコール・ワットの4倍の大きさを持つ大プリア・カーン、そして第5が北西へ150キロ離れた西の防衛拠点バンテアイ・チュマールである。これら遠隔5大遺跡は、アンコール・ワットよりも数倍大きく、地方都市を形成し、すべての道はアンコールへ、つまり内陸流通路（王道）で結ばれていた。

今回の踏査の映像記録はNHKテレビで放映（4/22 NHK「ハイビジョン・スペシャル」、4/28NHK「地球に好奇心」、7/4NHK総合「地球に乾杯」）済みであるが、調査団の活動現場から5大遺跡の破壊状況を報告し、熱帯の密林の中のテント生活の体験談と感想も併せて報告する。そして現地では、これまでのアンコール王朝論を塗り替える新発見もあった。この王朝とはどんな王朝であったかを究明する一つお手がかりを提示できると念じている。

今回調査した遺跡はアンコールワットよりも巨大で、しかも100キロ以上離れた密林の奥地に存在し、そこは往時はアンコール帝国を構成する地方拠点であった。今回の調査は王朝の全貌を解明しようとする地道な調査研究であり、カンボジアの文化遺産を学術調査の立場から記録し、報告する日本で初めての5大遺跡報告会である。

カンボジア奥地の密林の中に眠る巨大遺跡について、緊急の現状報告と併せて調査団の研究成果をご報告申し上げたい。

以上（2001年4月25日）